

NEWS RELEASE

令和7年9月18日

独立行政法人日本スポーツ振興センター

広報室

警察庁・長野県山岳遭難データの分析結果公表について

独立行政法人日本スポーツ振興センター国立登山研修所（以下、登山研）は、警察庁及び長野県警察から山岳遭難データ（2021～2023 年）の提供を受け、分析した結果を以下のとおり JSC ウェブサイトに公表しました。

本資料及び報告書が、年代や性別に応じた、効果的な遭難防止対策検討のためのエビデンスとなり、山岳遭難事故防止の一助となれば幸いです。また、登山研は今後も、警察や消防、自衛隊、民間の山岳救助組織、その他山岳関係団体と連携して、山岳遭難データを時宜に応じて収集・分析し、時代に即した、山岳遭難減少・防止に役立つ知見をまとめて、広く発信してまいります。

記

1 分析結果の資料及び報告書掲載 URL （<https://www.jpnsport.go.jp/tozanken/kyousai/tabid/76/Default.aspx>）

(1) 警察庁提供データの分析結果（資料）

<https://www.jpnsport.go.jp/tozanken/Portals/0/images/contents/syusai/2025/zenzanso/20250711keisatsucho.pdf>

(2) 長野県警察提供データの分析結果（資料）

<https://www.jpnsport.go.jp/tozanken/Portals/0/images/contents/syusai/2025/zenzanso/20250711nagano.pdf>

(3) 長野県警察提供データの分析結果（報告書）

<https://www.jpnsport.go.jp/tozanken/Portals/0/images/contents/syusai/2025/zenzanso/20250731nagano.pdf>

掲載ページ
二次元バーコード

2 分析結果の概要（別添資料参照）

(1) 警察庁（全国）データ

- ① 「道迷い」は、特に若年層（20～30 歳台）において減少傾向の可能性があること。
- ② 「転倒」の増加が顕著であること。
- ③ 「転倒」の多い年代の幅が、中年（40～50 歳台）に広がりつつあること。
- ④ 「病気」「疲労」が、高齢者（60 歳以上）を中心に増加していること。

(2) 長野県警察データ

- ① 男女とも、中高年の「転倒・転滑落」が多くなっていること。
- ② 男性については、「道迷い」が少なく、中高年（特に 50 歳台から 70 歳台まで）の「疲労（のみ）」が多くなっていること。
- ③ 女性については、中高年（特に 50 歳台・60 歳台）の「転倒」が突出していること。

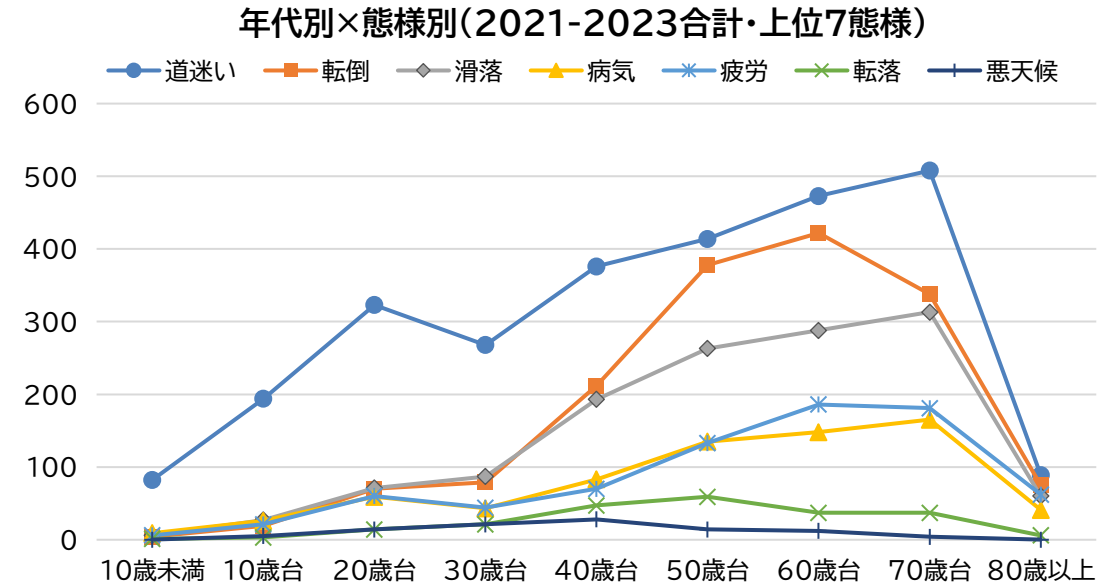
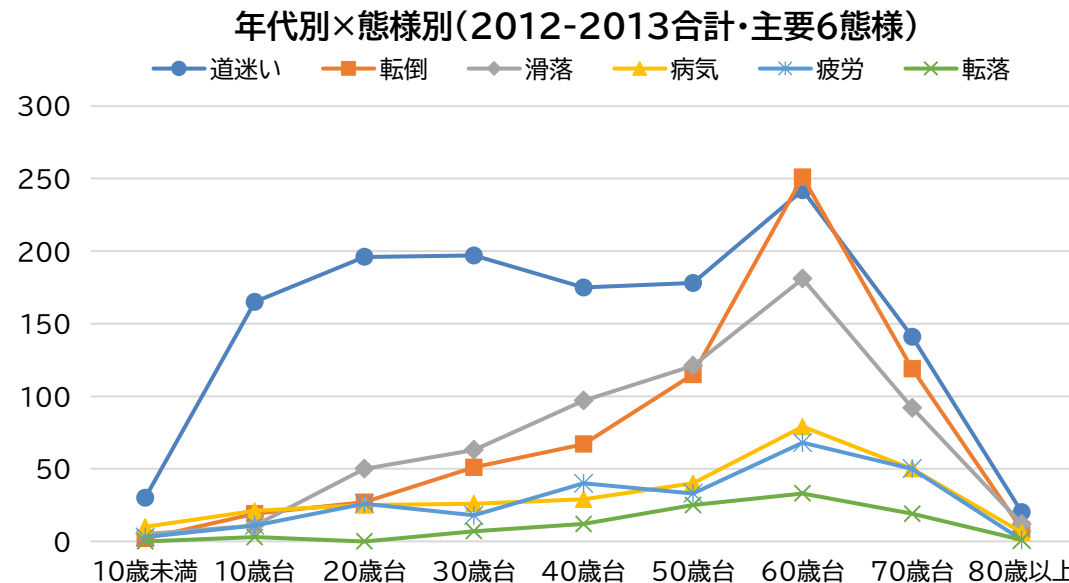
以上

【概要】警察庁提供山岳遭難データ(2021~2023年)の分析結果

■2012~2013年の分析結果と比較して、

- ① 「道迷い」は、特に若年層(20~30歳台)において減少傾向の可能性があること。
- ② 「転倒」の増加が顕著であること。
- ③ 「転倒」の多い年代の幅が、中年(40~50歳台)に広がりつつあること。
- ④ 「病気」「疲労」が、高齢者(60歳以上)を中心に増加していること。

以上が、統計的に「有意」又は「有意」とまでは言えないものの傾向が読み取れるもの と言えます。



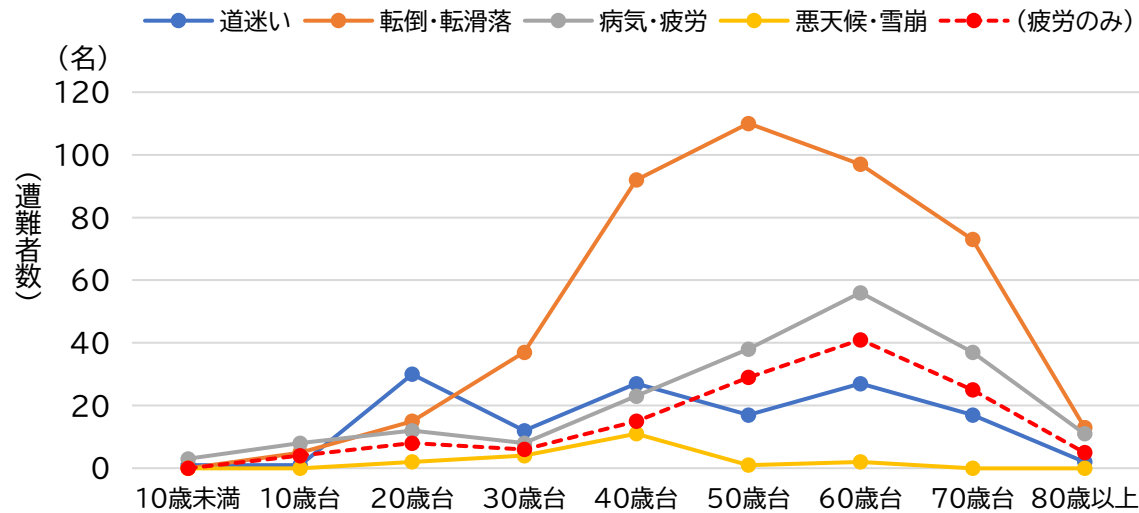
※ ただし、都道府県別に見ていくと、例えば「道迷い」では、各都道府県の全遭難数に占める割合が89.5%から12.7%までと大きな開きがあり、各山域や都道府県の特徴・環境等を個別に見ていく必要があります。

【概要】長野県警察提供山岳遭難データ(2021~2023年)の分析結果

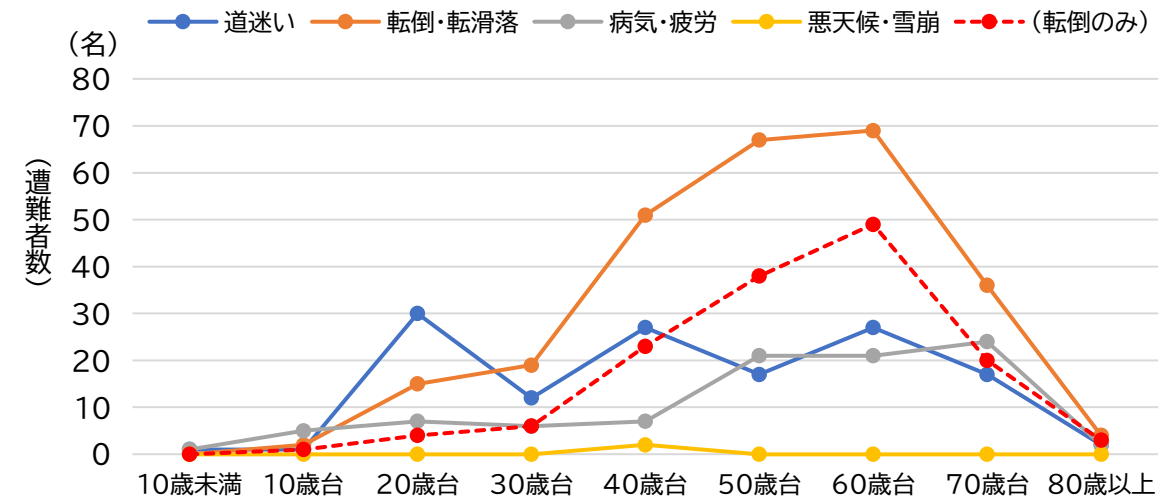
- ① 男女とも、中高年の「転倒・転滑落」が多くなっていること。
- ② 男性については、「道迷い」が少なく、中高年(特に50歳台から70歳台まで)の「疲労(のみ)」が多くなっていること。
- ③ 女性については、中高年(特に50歳台・60歳台)の「転倒(のみ)」が突出していること。

以上が、統計的に「有意」又は「有意」とまでは言えないものの傾向が読み取れるもの と言えます。

男性:年代別×遭難態様別(2021-2023合計)



女性:年代別×遭難態様別(2021-2023合計)



※ 他に、「気象遭難」は、統計上は遭難者数が少なくとも重大事故につながりやすいことや、「転倒」「病気」「疲労」:夏型の遭難、「滑落」:通年型の遭難であることが明らかになりました。

【概要】分析結果から考えられる対策等

① 「道迷い」減少の要因と対策

スマートフォンが全国民の9割以上に普及し、山岳遭難数の多い60歳台でも9割以上、70歳台でも8割以上の普及となっています。スマートウォッチなどのウェアラブルデバイスも含め多くの機種でGPSセンサが搭載され、悪天候時でもある程度正確に素早く現在地や方位、標高がアプリ上で表示されるようになったことが、「道迷い」減少の要因の一つとなっていることが推測されます。

「道迷い」の減少傾向は、今後も続くことが予想されます。昔ながらの紙地図は、広い範囲や大まかな地形を全体的に俯瞰しやすいというメリットがあり、デジタルツールは現在地の把握や細かな地形の確認、ルートの先読みに優れ、両方をバランスよく習熟して組み合わせて使用していくことが、今後のカギとなります。

② 「転倒・転滑落」「病気・疲労」増加の要因と対策

登山回数の最も多い年代が70歳台となり、加齢による行動体力(筋力、バランス能力、敏捷性等)や認知機能の低下が、「転倒・転滑落」「病気・疲労」増加の要因の一つとなっていることが推測されます。

「転倒・転滑落」「病気・疲労」の増加傾向を止めるためには、自身の体力・技術・精神の限界を越えないような身の丈に合った山を選ぶなど、無理のない登山計画の作成と実行が必要です。また、それ以上に、登山に効果的なトレーニングの計画的な実施や、日々の運動習慣・健康・体調管理・疾患の治療等による「ライフパフォーマンス」の維持・向上が今後のカギとなります。